

本論文は

世界経済評論 2017年9/10月号

(2017年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料
OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

人間の顔をしたASEANを理解しよう

桜美林大学特別招聘教授、東京大学名誉教授 猪口 孝

ASEAN50周年(1967年創立)と聞いて、日本はなにを置いても、ASEANの際立った半世紀を称賛すべきである。ASEAN諸国は大国の波のなかで大きな激動をずっと経験し、現在を達成していることを常に想起しなければならない。日本としてはASEAN諸国が第二のOECDとして、大きな経済的な固まりとして存在してほしいのかもしれない。しかし、ASEAN諸国をみれば、恒常的に加速的に変化し続ける社会をなんとかガバンしているだけで大変なのに、加盟国の共通ルール設定や相互の経済活動の促進が期待されていることはわかるがゆっくりとしか進まない。ビザなしの移動、環境汚染(森林焼却伐採)、大量移民、人種の宗教的排斥、急速な開発の恩恵と歪みなど、問題はきりが無い。風も嵐も乗り越えてきたASEAN諸国は独立してから日も浅い。日本-ASEANで重要なのはASEANの文化、歴史を具体的な顔を付けた形でよく知ることだ。

ASEAN諸国である程度の馴染みがあるのは客員教授としてシンガポール大学2回、ガジャマダ大学1回を記録しているシンガポールとインドネシアである。ガジャマダ大学ではインドネシア語(バハサ)を少し勉強した。川の上流で水遊びをしているこどもにバハサ(国語)を話すかと質問した。「ピサ・ピチャラ・バハサ・インドネシア?」、答えは「ティダク」(ダメです)といいながら、noと言うくらいは国語ができるのだ。ジョグジャカルタならば、小学校以前はジャワ語、小学校で国語、中学校で英

語、大学でもう一つの外国語というようにどんどん学習していくのがインドネシア流である。私をよんでいただいたヤヒヤ・ムハイミン教授は控えめな方で小さな声で話す。当時、ジョグジャカルタの自宅でも日曜日には困っているこどもたちを集めて教えていた。民主化の後、アブドラフマン・ワヒド大統領の教育大臣になった。小淵総理の葬儀に大統領とともに来日、きどらない(バジャマみたいな)服装で往時を偲んだ。大きなホテルの一階分全室をインドネシア一行が使ってみんなゆったりとしている。

シンガポール大学に最初によんでいただいたのはシャー・チーミョー教授。日本語に堪能であるばかりでなく、日本人の心の動きを敏感に察する方だった。1980年代のバブル形成最中の頃だったので、日本語を学習する学生も非常に多かった。シンガポールでは英語がほとんどであるが、中国語とマラヤ語(インドネシア国語に近似)でも正式なところでは短く使うと、意外なギョギョという顔をつくる人もいた。ある日対岸のマレーシアに夫婦四人一緒にピクニックに行くことになった。中国人の好きな標語がついた朱色の札が両側についた墓にもお参りし、マングローブのなかを舟で回り、楽しかった。後で分かったのだが、教授の兄は独立以来大学の近くにある大きな刑務所(政治犯とされ)に繋がれたままとのこと。その日は独立記念日で行事には多分出たくなかったのではないかと。政治の変動の影響はずっと続いていたのだ。教授は最近死去した。

(いのぐち・たかし)